

文化



竹沢泰子・京都大人文研教授

たけざわ・やすこ 神戸市出身。1989年、米ワシントン大博士課程修了。専門は人種・エスニシティー論。著書に「日系アメリカ人のエスニシティー」「人種概念の普遍性を問う」(編著)など。

分断に疲れ、統一へ渴望感

根深い人種問題の中 幅広い層から「希望」

■世代という要因

オバマ氏勝利には、世代と

実際、差別是正措置への対

公民権法成立後も黒人と白人間の平均資産の格差はむしろ広がっている。

一方、「被害者の物語」を黒人から聞かされ続けるのに閉口し、差別是正のための優遇措置(アファーマティブ・アクション)を「逆差別だ」と反発を強める白人も多い。米国の人種問題はそれほど根深いものだが、オバマ氏はその呪縛にとらわれない存在だった。

異人種間結婚や、グローバル化に伴って外国で生まれ育った人が増えるなど、オバマ氏の生い立ちまさに二十一世紀アメリカの多様性を象徴している。

とはいえ、多様な立場の人たちが支持したというのは、それぞれが都合よいリーダー像をオバマ氏に期待している裏返しでもある。選挙戦の途中では黒人社会の中でさえ、オバマ氏の特異な立場や中立的な態度に対して批判があった。

課題を抱えてはいるが、分断灯をともし、世界中の人々の黒人観を変え得るインパクトを持つ。過度の期待と困難なことを願っている。

オバマ氏勝利のニュースで印象的だったのは、黒人白人を問わずに大勢の人たちが涙を流して喜ぶ光景だ。「結束」を訴えたオバマ氏の演説が、単なる理想論ではなく、分断からくる閉塞感や心の傷を抱えたアメリカ人の心の奥深くまで浸透していた証拠だろう。

■人種の壁超えたか

しかし、彼の勝利が「人種の壁を越えた」という見方には違和感を感じる。今のアメリカ社会はさまざまな対立と分断に疲れ切っている。人種もその一つで、みんながその深刻さを理解しながら、袋小路から抜け出せない。金融問題が追い風となったのは確かだが、統一への渴望感こそが、オバマ氏のような多様な背景と活動実績を持った指導者の選択につながったと見るべきだ。

黒人であるというには二つの要素がある。一つは肌の色が濃く、外見で差別されること。もう一つは、黒人の家族やコミュニティで育ち、集

下

変革のうねり

米大統領選を聞く

団が持つ歴史的苦しみ(ケニア人留学生の父と白人の母の間)に生まれ、黒人社会では育たなかったオバマ氏は、二つの目の要素が欠けている。それが結果的に、大統領として幅広い国民に受け入れられる要因の一つとなった。

本当に人種の壁を超えたというなら、黒人コミュニティの指導者ジャクソン師らの主張も白人から支持を得るはずだ。だが、彼らのような旧世代には、白人へのぬいぐたい不信と憎悪がある。歴史的にそんな感情が起って当然の経緯をきているし、

米国内で、外国生まれの人口は二〇〇〇年時点で全体の約12%と急増しており、九〇年以降のアフリカ系移民数は、大西洋間の奴隷貿易で連れて来られた黒人数を上回った。

歴史を振り返れば、人種問題をめぐって、アメリカ社会は振り子のように揺れ続けてきた。六〇年代は、公民権運動が法的な人種差別撤廃にまで実を結んだ夢の時代だったが、それが八〇年代半ば、一部の中産階級をのぞくと黒人の敵しい状況はほとんど変わらないうちに業を煮やし、人種闘争が再燃。今、オバマ氏の勝利で振り子は再び希望へと戻ろうとしている。

初めての非白人大統領の実現は、黒人や他のマイノリテ